ナイルの河辺・悠久の歴史と文化が交錯する街ーカイロ

ピラミッドとスフィンクスに見守られて

元　エジプト・アラブ共和国　カイロ日本人学校

現　鹿追町立鹿追中学校　　稲　葉　珠　樹

１　はじめに

３年前の冬、派遣先がエジプト・カイロに決まった瞬間、私は小さく「ヤッター。」と叫んだ。不安や心配はともかく、そのときからすでに私はエジプトの虜になっていた。「世界４大文明発祥の地」「ピラミッド」「スフインクス」「クレオパトラ」「大河ナイル」、今まで自分の中で単なる知識としてしか存在しなかったものがすべて自分の目の前にある。そう思うだけで胸がわくわくした。

あれから３年。エジプトは私の期待を裏切ることなく、私にそして私たち家族に生活の糧のすべてと貴重な経験を与えてくれた。

2　エジプトの国土と気候

エジプトの総面積は日本の約2.7倍の広さで、その大部分はさばくに覆われている。国土の中央を「母なる川」ナイル川が南北に流れており、主要都市の多くがその流域に位置している。ナイル川流域には肥沃な土地が広がり、グリーンベルトと呼ばれるエジプトの重要な穀倉地帯となっている。

カイロ市などの内陸部ではほとんど雨が降らず、夏は連日４０度を超える。とはいえ、湿度が低いため、日陰に入るとかなり暑さをしのぐことができる。（余談だが、７月から８月の２ヶ月間、私たちにとっては耐え難い暑さの日々が続く。しかし、この期間、、サウジの大富豪にとっては、カイロは絶好の避暑地となる。サウジよりもエジプトの方がずっと涼しいらしい？！彼らの多くは４人の妻をもち、長期間に渡り５つ星以上のホテルのスィートルームを貸し切っている。連日連夜、彼らはカジノに出かけ、カイロ経済を潤し、さらにエジプト人の純粋な心を惑わせながらアラビアンナイトinカイロを楽しんでいた。）

私の３年間の赴任期間中、雨が降ったのは僅か１０日程しかない。ところが、ひとたび雨が降ると排水設備が整っていないため、交通機能や電気・水道といったライフラインが一時的に麻痺することがあった。（我が家も電話線がショートして、電話がつながらなくなったことが度々あった。）高速道路では、交通事故が多発。（事故の多くはスリップによるもの。タイヤの極端なすり減りが原因であった。）＊エジプトの車のほとんどが整備不良

冬にはコートが必要なほど冷え込み、夜は毛布が手放せない日々が続く。しかし、道産子の私たち家族にとっては、あの程度の寒さはほとんど苦にはならなかった。（真冬の最低気温は７度くらい。初秋の北海道の朝晩の寒さと同じ気候。日中は２０度前後になる。）

ただ、ひとつ寒さで苦労したことは、家の中の寒さである。断熱材や暖房設備がほとんどないので、シャワーを浴びたあとはひじょうにつらかった。このようなときは、真冬で

もＴシャツで過ごしていた北海道の家の暖かさがとても恋しかった。

ところで、春先（２月末から４月上旬）にかけて南からハムシーン（砂嵐）がやってくる。町中が黄土色に煙るばかりか、窓の隙間から部屋の中に土ぼこりが入り込んでくる。精密機器の故障が頻発するのはこういった埃が原因となる場合が多い。まさにエジプトが「埃及」と書かれる所以ともなっている。ハムシーンは砂埃だけでなく、さまざまな病害虫も運んでくる。伝染性はないが、なんとなくハムシーン時期には、虫ささされが身体のあちこちにできたり、あるいはカゼでもないのに熱を出して体調を崩す人が多くなる。学校の校舎や中庭（パティオ）もハムシーンが来ると、わずか３０分ほどでゴミと砂ぼこりでいっぱいになる。

３　首都カイロ

カイロの街はいつも喧噪（けんそう）に包まれている。モスクから流れるアザーンの響き、道路にひしめく車のクラクション、そして人々の声。この喧噪の中にさまざまな文化が共存している。

古代文明に端を発し、以来数々の歴史的変遷を経て、現在のカイロの街が形づくられた。今もなお旧市街にはイスラム都市の独特の街並みが続き、新市街には、高層マンションやビルが建ち並んでいる。郊外には緑豊かな農村、そしてその周りにはさばくが広がっており、ピラミッドをはじめ数多くの世界遺産が点在している。今、カイロは変動する中東情勢の中で、世界に最新情報を発信する窓口となっている。

カイロの治安は、中東・アフリカの中では極めて良い。赴任中、市の繁華街やシナイ半島で何度かテロ事件が発生したが、私たちの日常の安全は警察によってしっかり守られていた。この状況は、私たちには何にもかえがたい幸せなことであった。しかし、逆に、それが私たちの気のゆるみにつながりかねないので、私たちは平和の中にも常に「危機管理の意識」をもつことに努めていた。これは、日本人学校の児童生徒そして保護者のだれもが同じであった。

４　カイロ日本人学校

平成１９年３月現在、カイロ日本人学校には、小学生３３名、中学生９名が在籍していた。学校のすぐそばには、世界遺産として名高いギザの３大ピラミッドがそびえ、連日多くの観光客でにぎわっている。学校の中庭には、エジプトを代表する火炎樹の木が２本あり、毎年５月には炎のような真っ赤な花を咲かせる。

近年、学校周辺も開発が進み、高層マンションが建ち並んでいる。その一方、近くにはナイル川から水を引いた運河が流れ、豊かな農地が広がっている。そこで生産された農作物を運ぶ手段として、ロバや馬が活躍。ゆうゆうと道路を闊歩している。

カイロ日本人学校　中央の赤い花が火炎樹　　左奥にピラミッド

５　カイロ日本人学校の目玉行事

(1)現地理解教育

植樹後の記念写真

植樹中の一コマ

学校から約１２５ｋｍ離れたワディ・ナトルーンというさばくに本校の植樹園（日本の協力で作られた農園）があり、毎年５月に全校で植樹活動を行なっている。この活動を通じて、環境保全の意義を学習している。

このほか中学部はカイロ博物館見学、ピラミッド測量、小学部高学年は浄水場（日本の技術・資金援助で建設された施設）や自動車（ＢＭＷ）工場見学、低学年は学校近辺の探検や商店での買い物、ギザ動物園見学などを行っている。これらの学習は、より深くエジプトを理解することを目的に行われ、子どもの主体的活動によって進められている。

全校でラマダン菓子パーティ

学校のスタッフの家でエジプト料理体験

JICAの活動を見学ーバハレイヤにて

(2)現地校との交流

本校近くにある現地校のアルスン校（インターナショナル校）と年間を通して交流。運動会や学習発表会をはじめ、授業やクラブ活動交流を通して友達関係のできる活動を目指している。また、カイロ大学日本語学科の学生や福祉施設ダールエルオルマン校との交流も行っている。さまざまな交流を通し、日本文化を紹介し、さらに福祉の心を育てる教育を展開している。

アルスン交流　ペットボトル巨大床絵

ジャパンデー　カイロ大生ともちつき

学習発表会の一コマ　オペラハウス

６　カイロ日本人学校のオリジナルの行事

(1)ピラミッド持久走

　冬に行われるピラミッド持久走は、ギザの三大ピラミッド近く（学校から車で１０分程度）のさばく道路を駆け抜けるカイロ日本人学校ならではの行事となっている。

　この持久走には、子どもだけでなく保護者や教師も自分の体力に合わせた距離で参加することができる。コースは、１㎞から４㎞。それぞれが目標を立てて自分のコースを選択し、持久走大会に臨む。

三大ピラミッドをバックにさばくを快走！？

マラソン後、親子＆各担任で記念撮影

(2)さばくハイキング

　さばくハイキングも冬の恒例の行事となっている。３年サイクルで毎年場所を変えて全校で実施。さばくにある珍しい化石（例えば木化石）をさがしながらハイキングをしたり、あるいはギザの三大ピラミッド以外のピラミッド（サッカラ、ダフシュールなど）の周辺をハイキングすることもある。（４㎞から６㎞）

ダフシュール、黒ピラミッド（中学部）

ダフシュール

屈折ピラミッド（小学部）

(2)修学旅行

昨年度から小学部（５・６年生対象）と中学部（２・３年生対象）に分かれて、１年交替で修学旅行を実施している。小学部は国内旅行（２泊３日)、中学部はギリシャ旅行（３泊４日）を基本としている。小学部の国内旅行については、そのときのエジプト国内の治安を考慮しながら、旅行地を決定している。しかし、少しでも体験的な活動を重視するために、昨年度はバハレイヤオアシス近くのさばくでキャンプを行った。ちなみに、私が小６の担任をしていたときの修学旅行は、シナイ半島で登山をした。（ラクダと徒歩でシナイ山に登った。）＊シナイ山＝モーセが十戒を授かった山

小学部　白さばくでキャンプ

中学部　ギリシャ　パルテノン神殿前

７　３年間のカイロ生活を振り返って

(1)エジプト人、万歳！

カイロでの生活は私にとっても家族にとっても大変貴重な体験となった。気候も風土も文化も全く異なる町カイロ。赴任当初は驚きと戸惑いの連続で、心も身体も悲鳴を上げそうなくらい毎日疲れていた。

いつでもどこでも私達につきまとう「文化の違い」。その最たるものが、エジプト人の気質と生活習慣だった。赴任当時、職場の同僚が、「エジプト人を理解するには、まず、ＩＢＭを理解することだ」と教えてくれた。ＩＢＭ、これはアラビア語のある単語の頭文字をつなげたものだが、３年かかってもエジプト人のＩＢＭを完璧に理解することはできなかった。

Ｉ＝インシャーラー（アッラーが決めてくれますよ）　＊はい、わかりましたの意
Ｂ＝ボクラ（明日）　＊明日という意味だが、何かを先延ばすときの口上として使う。
Ｍ＝マーレッシュ（ごめんなさい）＊日本語の「すみません」に似ている。

とにかくカイロの生活では、よく「もの」が壊れた。電化製品も、電気も水道もトイレも、エレベーターも壊れた。そのたびに、修理屋（モハンデス）を家に呼ぶのだが、彼らとの駆け引きこそが、まさにＩＢＭ理解の練習の場であった。約束の時間に遅れるのは日常茶飯事（遅れる理由もさまざま、よくもこんなウソがつけるなというような言い訳を聞かされる場合もある)、遅れるならまだしもその日に来ない（次の日に来ればまだいい方、ときにはそのままずっと来ないことも)、ようやく修理にきても、最後まで完璧に修理が

できる人は少ない。ひどい場合は、バラバラに分解して「もう自分では手に負えない」と言って帰ってしまったり､修理をしたふりをして何も直っていないということもしばしば。このような体験を重ねながら、私も家族も少しずつＩＢＭを理解していった。

赴任したばかりの頃は、私以上に妻が苦労していた。連日、家に出入りするさまざまな修理屋。そのたびに一人で彼らの仕事ぶりに目を光らせていなければならない妻。時には修理屋が約束をすっぽかして来ないことも・・・そのようなときは妻は一日中どこにも外出できず、家に軟禁状態。日に日にストレスがたまり、やつれていく妻の姿にはらはらしながらも、新しい学校での仕事をこなすのに精一杯な自分。とにかく妻の精神力の強さに賭けるしかなかった。

修理屋以外にも、日常生活で苦労することはたくさんあったし、多くのトラブルも経験した。しかし、すべては多くの人の助けと時間が解決してくれた。なかでも、エジプト人の同僚・友人の助けなしには、カイロで暮らすことができなかった。

ＩＢＭに代表されるようにエジプト人の気質は理解できない部分がたくさんある。しかし、これは日本人にも同じことだ。エジプト人の多くの友人が、よく私に尋ねた。「どうして日本人は時間に対して厳格なのか。そんなにあくせく働かなくても、時間はあるのだから、もっと余裕をもってやってもいいのではないか。」と。「これが日本人の美徳なのだ。時間を守らないと人から信頼されないのだ。」と私が説明しても、彼らにはあまり納得できなかったようである。エジプト人と日本人、やはり文化が違うので互いに理解しがたい部分は多かれ少なかれあるが、それでもエジプト人は、日本人に対して実に友好的であった。この友好的な態度は日本人だけに向けられたものではなく、誰に対しても同じであり、エジプト人が生まれながらに持ち合わせた「人としての優しさ」からきているものだと思われる。

私たち日本人が忘れかけている本当の優しさ（思いやり）をエジプト人はもっているのだ。日本に比べればエジプトは決して豊かではない。貧富の差も大きい。けれども、困っている人がいれば、知り合いであろうがなかろうがみんなで手を貸し、協力し合う。道ばたでけんかが始まれば、見ず知らずの他人が仲裁に入ってけんかを止める。

どこかで何かトラブルが起これば、他人事で見過ごすのではなく、自分のことのように受け止めるてくれるエジプト人。時には、このエジプト人の優しさが、うっとうしく思われることもあった。しかし、日本に帰ってきた今、エジプト人の優しさと人間くささがとても懐かしい。エジプト人の良さを私たち日本人も見習わなければと日々感じている。

(2)教諭から教務主任、そして教頭（現地のみの期限付き）へ

赴任１年目、小６の担任。６年生のクラスに自閉症の子どもがおり、私が小学校と特殊教育免許をもっているということで小６担任となった。（そのほかにも、中学部全学年の国語を担当、＊日本人学校に派遣されるためには「教員免許の種類と数」が重要だということを実感）１年目はとにかく無我夢中で仕事をした。

赴任２年目。教務主任。それまでは３年目の派遣教員が教務主任となっていたが、主任になる予定の３年目の同僚が急遽、教頭になることになった。実は、この年から、カイロ日本人学校には、教頭の派遣がなくなった。そのため校長と学校運営委員長の裁量で、一般教員から臨時の教頭職（現地のみの期限付き）をおくことになった。このことにより、

私が教務主任となった。そのときの教務主任としての業務はおおむね次のようなものであった。各教室の解錠（毎朝）、各月の行事予定の確定および連絡調整、小中全学年の毎週の時間割作成、学校行事の司会、企画会議（構成：校長・教頭・教務主任・副教務主任）の運営、職員会議の司会、現地採用教員（特にエジプト人講師）の研修支援、学校評価（保護者・児童生徒）の実施および結果の集計（提示）、これらのほかに中２担任、週１７時間程度の授業時数。

前任校で教務主任をやっていた頃とは比べものにならないくらいの仕事量であり、目が回るような忙しさであった。しかし、とても充実していた。特に、１年目のとき以上に各都府県から派遣されてきた同僚の力量に感服し、大いに刺激を受けた。また、このとき改めて、他県では、学校運営において教務主任の果たす役割がひじょうに大きいということを強く感じた。

そして、３年目。前任の教頭の帰任にともない、校長から教頭に任命される。しかし、ここで一つの問題発生。実は校長も私も同じ年次での派遣（２００４年派遣）。私を教頭にすれば、次の年は校長、教頭二人そろって帰任となる。そこで、校長が文科省と折衝し、私を次年度（２００７年度）までカイロに残すという腹づもりをもった。私も４年目を覚悟した。

カイロでの教頭の仕事はひじょうに忙しかった。だが、日本での教頭としての経験がないので、あの忙しさが日本の場合と比べたらどうなのかは、比較はできない。

教頭としての通常業務のほかに、海外では、海外ならではの教頭としての業務がある。数ある業務の中で、私にとって常にプレッシャーとなりながらもいい刺激となったのが、大使館との連絡調整、さらに文科省への報告連絡、そして国内外の団体との連絡調整（学校訪問依頼があったときのすべてのセッティング等）、企業からの各種調査依頼および報告だった。

特に、文科省関連の業務については、常にスケジュールを確認しながら、締め切りに遅れないように気を配っていた。ちょうど昨年は日本国内でいじめの問題が深刻化し、常に文科省からいじめに関する資料や通達（あるいは大臣名の緊急メッセージ）が頻繁に送られてきていた。そこには児童生徒への指導はもちろん、保護者への啓蒙も含まれていたため、文科省の資料や通達をかみ砕きながら、保護者にいじめ撲滅のためのメールを送ることがたびたびあった。

さらに教頭の仕事のほかに、週１５時間程度の授業、エジプト人英語講師のための研究授業の実施、毎月の学校運営委員会の準備、時には学級担任とともに家庭訪問をするということもあった。

カイロならではの業務として、現地職員の給与査定も教頭の仕事の一つとしてあった。これは、現地職員のふだんの働きぶりを評価し、それを学校運営委員会に報告することであった。現地職員の給料のベースアップ額とボーナスの支給率が私の評価も加味されて決定される。この仕事は数多くある業務の中でもっとも気が重かった。派遣教員の勤務評価も、校長と教頭で行わなければならなかったが、こちらのほうは、すぐに明日からの生活に影響するわけではないので、現地職員の評価に比べれば、少しだけ気が楽だった。しかし、現地職員の給料査定については別だった。彼らの生活の苦しさを日々目の当たりにしていたので、私の評価がすぐに彼らの生活に影響すると考えるととても心苦しかった。

１０月、突然の帰任決定。私にとっても校長にとっても寝耳に水だった。その後、何度か校長が私をカイロに残すよう文科省に働きかけたが、あくまでも道教委の意向を尊重するということで、そのまま帰任となった。

私にとってカイロ日本人学校で勤務した３年間は、めまぐるしいものだった。特に、私は毎年違う立場の仕事をさせていただいたおかげで、他の派遣教員よりも２倍以上の仕事の種類をこなしたかもしれない。しかし、これはあくまでも仕事の数の問題であって、全体の仕事量は他の派遣教員と同じであった。

国内の小中学校も忙しいが、日本人学校はそれ以上に忙しい。日本人学校は、国内の学校の職員定数の８割以下の人数で、小中両方の学校運営を行わなければならない。日本人学校では、それぞれの先生方の「授業作り」の力量が試されるのと同時に、コミュニケーション能力（子ども・保護者・職員、そしてエジプト人）も試されている。さらに地域社会（日本人社会）からの期待や、日本人学校へ子どもを通わせる保護者の期待もひじょうに大きい。そのため、日本人学校は常に「注目の的」となってしまう。時には、派遣教員の私生活までもが注目の的になりかねない。それが大きなプレッシャーやストレスになることもある。

しかし、自分が好きで志望した海外勤務。何が何でもがんばろうという気構えは常に持ち続けていた。そしてその気力を支えたのが、自分の健康と体力、そして家族の健康と協力であった。

※カイロ日本人学校とギザの三大ピラミッド

※スフインクスがあるのは、中央のカフラ王のピラミッド前

※スフィンクスは、カイロ日本人学校の方を見ている。

学校裏のマンション屋上から撮影

バクシーシ（チップの一種）を払って特別に撮影許可を得た